

2017 年 12 月 21 日

## ＜「財政学」レポート：三井＞

3 年生以上でレポート提出を希望する者は下記の要領でレポートを提出しなさい。ただし、以下の条件を満たさない場合、提出したレポートは成績評価の対象とはならない。

＜レポートが評価対象となるための条件＞

レポートの点数を成績評価に加える前の成績が 100 点満点で 50 点以上かつ 60 点未満の場合にのみ、提出されたレポートを評価の対象に加える。また、その場合のレポートの点数を加えた成績の上限は 50 点である。

### 記

- ① テーマは講義の内容に関連したものであれば何でもよい。
- ② レポートは「財政学」の学年末試験の解答用紙と一緒に提出する。
- ③ 用紙は A4 を使用し、枚数は 5 枚以上かつ 10 枚以下とする。
- ④ 書式は 1 枚 1200 字（＝40 字/行×30 行）とする。
- ⑤ 原則的にワープロを使用する。自筆で読みにくい場合には減点される。
- ⑥ 図書や論文などの文献を少なくとも 2 つ以上参考にする（推薦図書も参照）。
- ⑦ レポートのタイトル、学籍番号、氏名、参考文献を明記した表紙をつける。
- ⑧ ホームページなどを参照した場合はそのアドレスも表紙に明記する。
- ⑨ レポートの満点は 10 点であり、オリジナリティーが高く評価される。
- ⑩ ほとんど同じ内容のレポートが 2 つ以上あった場合、満点は半分になる。

以 上

＜推薦図書＞

- ① 吉野維一郎『図説、日本の税制＜平成 29 年度版＞』財経詳報社、2017 年
- ② 宇波弘貴『図説、日本の財政＜平成 29 年度版＞』東洋経済新報社、2017 年
- ③ 内閣府『平成 29 年度：年次経済財政報告』第 1 章、第 3 節「財政・金融政策の動向」、内閣府ホームページ、2017 年
- ④ 財務省『これからの日本のために財政を考える』財務省ホームページ、2017 年
- ⑤ 根本祐二『「豊かな地域」はどこがちがうのか』ちくま新書、2013 年
- ⑥ 小塩隆士『効率と公平を問う』日本評論社、2012 年
- ⑦ 根本祐二『朽ちるインフラー忍び寄るもうひとつの危機』日本経済新聞出版社、2011
- ⑧ マイケル・サンデル『これからの「正義」の話をしよう』早川書房、2010 年
- ⑨ 橘木俊詔『日本の教育格差』岩波新書、2010 年
- ⑩ ハロルド・ウィンター『人でなしの経済理論・トレードオフの経済学・』バジリコ株式会社、2009 年
- ⑪ 井堀利宏『誰から取り、誰に与えるか』東洋経済新報社、2009 年
- ⑫ 森功『血税空港：本日も遠く高く不便な空の便』幻冬新書、2009 年
- ⑬ 井堀利宏『「歳出の無駄」の研究』日本経済新聞社、2008 年
- ⑭ 西沢和彦『年金は誰のものか』日本経済新聞社、2008 年
- ⑮ 五十嵐敬喜・小川明雄『道路をどうするか』岩波新書、2008 年
- ⑯ 井堀利宏『「小さな政府」の落とし穴』日本経済新聞社、2007 年
- ⑰ 橘木俊詔『格差社会－何が問題なのか－』岩波新書、2006 年
- ⑱ 小塩隆士『人口減少時代の社会保障改革』日本経済新報社、2005 年
- ⑲ 高山憲之『信頼と安心の年金改革』東洋経済新聞社、2004 年
- ⑳ 三木義一『日本の税金』岩波新書、2003 年